

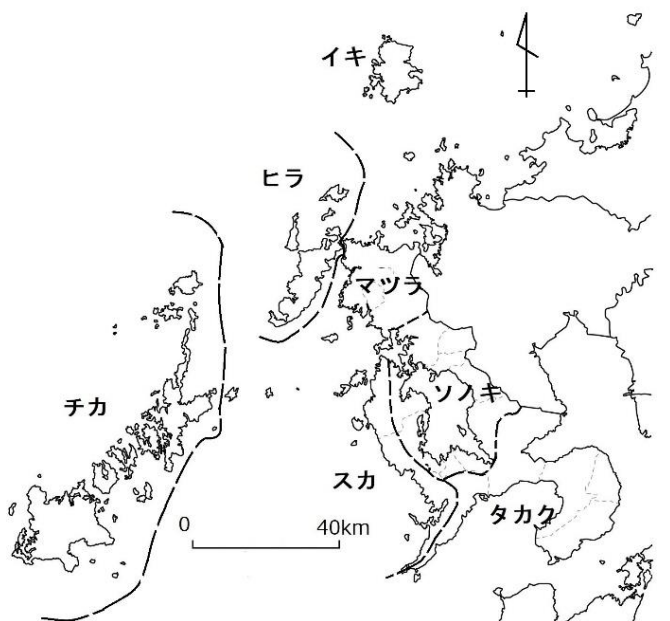
【研究ノート】肥前西部の中期古墳

古門 雅高

はじめに

筆者はこれまで、長崎県本土部の弥生時代と古墳時代前期の社会を復元するため、墓制・集落・生業・祭祀・威信財などの分析・検討を行ってきた（古門2020、同2022）。本来ならば引き続き同様の手法により、古墳時代中期・後期社会を復元すべきところであるが、今少し当地の横穴式石室などの墓制の整理と検討が必要と判断し、まずは古墳時代中期の初期横穴式石室と石棺系横口式石室および石棺系石室について整理、検討を行うことにした。

なお文中の人名は敬称を略させていただきます。



第1図 本稿の地域区分

1 長崎県の地域区分

長崎県本土部の中期古墳の考察を行う前に、長崎県の地域区分に触れる。地域区分の詳細は、既に筆者のこれまでの論攷の中で示したので、ここでは簡潔に記すことにする。

- 1 黄金山古墳
- 2 佐世保鬼塚古墳
- 3 ひさご塚1号、2号石室
- 4 前島6号墳、7号墳
- 5 中江18号墳
- 6 一野1号、3号、5号墳
- 7 曲崎2、3、10、22号、34号、101号
- 8 久津石棺A地点石棺
- 9 松ヶ崎古墳
- 10 小野古墳
- 11 小佐古石棺B群1号
- 12 下釜1号、2号墳



第2図 本稿関係の遺跡位置図

本稿では、マツラ（県北部）、タカク（県南部）、ソノキ（県中央部）に、イキ（壱岐）、ツシマ（対馬）、チカ（五島）の各島嶼を加えた地域区分と地域呼称を用いる（第1図）。さらにソノキの西部は「スカ」とする。

また、マツラに属す平戸諸島（宇久島、小値賀島を含む）は「ヒラ」と呼称する。

なお、これらの地域区分を現行の地方自治体にあてはめると、ヒラは平戸市、チカは五島市と上五島町に該当する。マツラは松浦市と平戸市の一部、および佐世保市と佐々町が含まれる。ソノキは大村市、東彼杵町、川棚町、西海市の東部が該当する。タカクは諫早市、雲仙市、島原市、南島原市が含まれる。

中四研編年	和田編年 (1987)	集成編年 (1991)	岸本編年 (2011)	大賀編年 (2002・2013)	鈴木編年 (2005 ほか)
I 期	一期	1 期	前 1 期	前 II 期	
II 期	二期	2 期	前 2 期	前 III 期	
III 期			前 3 期	前 IV 期	
IV 期	三期	3 期	前 4 期	前 V 期	
V 期			前 5 期	前 VI 期	
VI 期	四期	4 期	前 6 期	前 VII 期	中 1 期
VII 期	五期		前 7 期	前 VIII 期	中 2 期
VIII 期	六期	5 期	中 1 期	中 I 期	中 3 期
IX 期	七期	6 期	中 2 期	中 II 期	中 4 期
X 期	八期	7 期	中 3 期	中 III 期	中 5 期
XI 期			中 4 期	中 IV 期	中 6 期
XII 期	九期	8 期	中 5 期	中 V 期	中 7 期
XIII 期	一〇期	9 期	中 6 期	後 I 期	後 1 期
			後 1 期	後 II 期	後 1 期

第 3 図 古墳時代中期の編年対照表（岩本 2022 より）

2. 古墳時代中期の相対年代と実年代

本稿では古墳時代中期の墳墓を取り上げるが、近年、中期の始まりがいつからなのか様々な学説が提起され、定まらない状況である。例えば以前であれば古墳時代中期は 5 世紀から始まるのが定説であったが、今や中期初頭といえは 4 世紀末とされる。さらに古墳の編年そのものにも変化が及んでいる。これまで古墳時代中期は前方後円墳集成編年（註 1）の 5 期からというのが定説であったが、最近では 4 期からを中期とする学説も少なくない。もとより筆者にはこの問題を議論できる力はないが、筆者なりの現状認識を披歴して本稿の年代観としたい。

古墳時代中期の始まりの実年代が古くなっているのは初期須恵器の出現時期と関係する。大局的に見ると陶器窯跡群の須恵器で最も古い型式である TG232 の出現を 4 世紀末と見るか、5 世紀に入ってからと見るかによって学説が分かれる。前者は TG232 に共伴する木材、木製品の年輪年代測定法や炭素 14 年代測定法による結果を積極的に評価する立場からの学説である。後者は年輪年代測定法の測定結果は木材の伐採年を示すに過ぎないとして、従来の交差年代決定法を用いた編年に依拠した実年代を重視する学説である。

一方の相対年代に関しては、第 3 図に岩本崇による各研究者の編年観を集成した古墳編年対照表を掲載した（岩本 2022）。同表を見る限り、古墳時代中期の始まりを前方後円墳集成編年 5 期に求める研究者はほとんどいない状況である。今や前方後円墳集成編年 4 期新相前後ないし和田編年 5 期前後からを中期とするという学説が大勢ではないだろうか。当然ながらその実年代に関しては研究者によって見解が異なる。

年代	古墳時代編年 1～10期は『前方 後円墳集成』編年	近畿・中四国	九州	朝鮮半島	
300 350	前期 1期 2期 3期		西新町	(313 高句麗・楽浪郡を滅ぼす)	
			福岡・一貴山鏡子塚	353 平壤駅前修利墓	
				南井里 119号 (369 百濟・七支刀) 可楽洞 5号 (371 百濟・近肖古王平壤攻撃) (391 高句麗・広開土王即位)	
400 450	中期 4期 5期 6期 7期 8期	大阪・津堂城山	佐賀・谷口 福岡・老司 福岡・鋤崎	熊本・大蔵蔵尾張宮	
		須恵器編年 TG232	佐賀・横田下	熊本・小坂大塚	
		岡山・千足			(427 高句麗・平壤遷都)
		京都・雲部車塚			
		大阪・大仙陵 福井・向山1号 三重・おじよか	佐賀・小城円山	福岡・勝浦峯ノ畑	皇南大塚 (458 新羅・訥祗麻立干没)
500 550 600	後期 9期 10期	大阪・高井田山	佐賀・関行丸	福岡・勝浦井ノ浦前方部 福岡・セストノ 福岡・番塚	
		TK216 (ON46) TK208			馬山里1号 (475 百濟・熊津遷都)
		TK23 TK47			
				(528 磐井の乱)	(523 百濟・武寧王陵)

第4図 土師器による時期区分と前方後円墳集成編年・絶対年代（重藤 2019 より）

以上のような学界での現状を踏まえ、本稿ではTG232の出現を西暦400年以降、古墳時代中期の始まりを前方後円墳編年集成4期新相からとし、その実年代を4世紀の第4四半期頃とする。九州の研究者の編年で本稿のそれと合致するのは重藤輝行の編年観である（第4図）（重藤 2019）（註2）。そのため本稿では、重藤編年をもとに論じていく。

2. 長崎県本土部の中期古墳研究史

ここからは本県本土部の中期古墳の研究史を概観する。なお、本稿で用いる初期横穴式石室の用語は、畿内型横穴式石室出現以前の横穴式石室の総称とする学説もあるが（土生田 2015）、同石室の九州における展開を重視し、主に九州に分布する古墳時代中期の横穴式石室と定義する。分布は、ほぼ九州に限られ、竪穴系横口式石室・北部九州型石室・肥後型（石障系）石室・筑肥型石室に分類されている。

長崎県本土部を対象とした先行研究には福田一志、宇野慎敏、野澤哲朗の研究がある。

(1) 福田一志の研究

福田一志は大村湾沿岸の5世紀の墳墓を内部主体から4つのタイプに分類した（福田 1994）。具体的には

- ①前方後円墳で内部主体は石棺系横口式石室（ひさご塚古墳）（第2石室のことであろう—筆者註）
- ②石棺系横口式石室であるが、竪穴系横口式石室の影響が大きい（黄金山古墳）
- ③主体部は箱式石棺で、側石上に②の影響なのか、数段の板石積を行なう。（前島6号墳、小佐古石棺1号石棺）
- ④石棺に簡単な横口を設けるもの。

以上の4タイプである。そして福田は「これらはすべて在来の箱式石棺を基盤とするもので、他からの影響の中でも、伝統的な墓制から脱皮できない、あるいはしない大村湾岸の地域性を表わしているものと思われる。」と評価した(福田前掲 P.20)、福田は当地の中期古墳が箱式石棺を基盤として成立していることを既にこの時点で指摘している。

(2) 宇野慎敏の研究

宇野慎敏は当地に多い初期横穴式石室を竪穴系横口式石室ではなく、その影響を受けた石棺系横口式石室であるとした。さらに6世紀以降の当地の横穴式石室を「北部九州系石室」と呼び、その実態は石棺系横口石室から変化したものであると指摘した(宇野2018)。宇野は本県本土部には初期横穴式石室のひとつである「北部九州型石室」は見られないとし、同石室とは異なるという意味で「系」の字の上にあえて「・」を添えている。宇野によると「北部九州系石室」とは「北部九州型横穴式石室」が伝播したのではなく、(中略)当地の黄金山古墳やひさご塚古墳に見るように箱式石棺の上に板石を小口積みにして天井部を架構した石棺系横口式石室から横穴式石室へと変化した石室であると述べている(宇野前掲 p.2)。本県本土部の小規模な横穴式石室が石棺系横口式石室から展開したという宇野の見解には筆者も同意する。

また、宇野は主体部の長幅比や規模から、ひさご塚古墳1号石室や久津A地点石棺も石棺系横口式石室と理解し、下記のように3つの類型に分け、それぞれが有力首長の階層を反映しているとした(宇野2014)。さらに、これらの階層は「ヤマト政権内における階層序列に組み込まれたものではない」(宇野2018 P.7)と述べ、大村湾沿岸の有力首長らは倭王権と密接な関係をもちつつ、自立していたと説く。筆者も本県本土部の地域集団の動向を分析する中で、大村湾東岸の地域集団は古墳時代中期まで独立性が強かったことを指摘しており(古門2023)、その点では宇野の学説を支持する。

宇野の分類は

Aタイプ 有力首長上位層：ひさご塚古墳1号石室、久津A地点石棺

Bタイプ：同 中位層：黄金山古墳石室

Cタイプ：同 下位層：ひさご塚古墳2号石室

以上の3タイプである。

前述の福田分類と宇野分類は、前者が地域首長に加えてさらに下位の地域有力者の中・小規模墳まで含めて対象としているのに対し、後者は地域首長墓を対象としているという違いがあるだけで、両者の分類に大きな相違はないと筆者は認識している。

(3) 野澤(竹中)哲朗の研究

野澤哲朗も宇野と同様に石室や石棺の長さとの比率から当該期の石室を検討している。野澤は黄金山古墳やひさご塚古墳第2号石棺の長さとの比率が0.53~0.58であるのに対し、同じく石棺系石室であるが、後出する前島古墳群第7号墳、一野遺跡第1号墳などは0.4前後の比率を示すとして、「5世紀中ごろに須恵器の導入とともに新しい平面プランを持った石室構造がもたらされている」と結論付けた(竹中2003 p.16)。4世紀末から5世紀前半の当地の古墳石室の長幅比を用いた宇野と野澤の検討結果はほぼ同じと見てよいだろう。しかし、続く5世紀中頃以降の石棺系横口式石室に関する野澤の結論は、野澤が指摘する「新しい平面プランを持った石室構造(竹中前掲 p.16)の具体的な内容が示されていないこともあって検証が必要と考える。従来から竪穴系

横口式石室が地域の有力首長から下位の有力者に普及するに際し、小型化することが指摘されているが（重藤、西 1995）、後述するように当地の石棺系横口式石室にも小型化が及び、そのことが長幅比に反映されたと理解することも可能である。

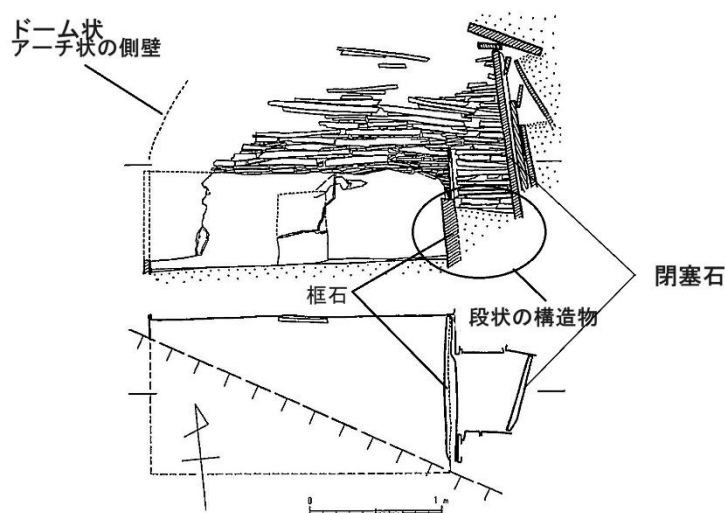
3 長崎県本土部の初期横穴式石室と石棺系横口式石室

本県本土部の古墳時代中期の代表的な墳墓として初期横穴式石室の佐世保鬼塚古墳や石棺系横口式石室を有する大村市の黄金山古墳がある。いずれも弥生時代から続く箱式石棺のような箱状の構造体を下部構造とするもので、そこに当地の保守的な地域性を見る評価が一般的である。しかし本稿では、これら旧来の伝統的墓制である箱式石棺＝当地の古墳時代中期墳墓の下部構造という通説をいったん保留し、それぞれの遺構にどのような地域のどのような技術や技法が影響したかという観点から検討していく。まずは複数の地域からの影響が窺える黄金山古墳から見ていく。

(1) 北部九州、中九州地方の影響が窺える古墳

①小田富士雄の報告に見る黄金山古墳（第5図）（第2図1）

小田富士雄の報告（小田 1979 以下小田報告）では黄金山古墳の石室の状況を「石室はすべて扁平な板石を使用して構築されており、主体部は半地下に営まれた組合式箱形石棺である」と記述している（小田前掲 p. 479）。上記の文章で筆者が注目するのは「半地下」という表現である。これによって石棺は石室に据え置かれたものではなく、埋め込まれたものであることが分かる。小田報告では側石（石障）の背後が積石の壁なのか墓坑の壁なのか不明だが、いずれにしても石室の石積みは墓坑底からではなく墓坑の肩から積まれていることを示していると解釈できる。さらに小田は「この石室の特異な点は、この箱形石棺を石室の腰石としてその上方に板石を平積みして本来ドーム状に構築されていたらしいことである」（小田前掲 p. 479）と記している。このことは控えをとることなく側石（石障）の上端直上から積み石をしているわけで、この点は写真1でも確認できる。詰まるところ石室と棺が不分離で一体となっていることを示している。同報告では「本古墳の如き石棺を腰石に見立ててその上に板石を積みあげている例は北九州にも知られていない。その意味では大村湾地域における地域的なものとして処理することも可能であるが、広義の石棺系横口式



第5図 黄金山古墳 (S=1/60) (小田 1979 より 一部改変)

石室の系譜に属せしめて不都合ないと考えられる」と評価している（小田前掲 p.484）。以上の小田報告を踏まえて同古墳の検討を進めたい。

②黄金山古墳の研究史と概要

大村市にあり円墳とされるが直径などは不明である。同古墳の先行研究には宇野慎敏の論攷がある（宇野 2013）。宇野は北部九州の初期横穴式石室墳である佐賀県唐津市の谷口古墳の石室比率や福岡市の老司古墳の墓坑掘方比率が黄金山古墳のそれと同じことを根拠に同一技術系譜上にあると認識し、玄界灘沿岸部の石室構築技術の影響が及んでいることを指摘した。併せて石室周囲の石棺状の板石（石障）や、ドーム状に石積みする構築方法は「肥後型石室と同様の構築技術系譜上にある」と主張している（宇野前掲 p.139）。このような宇野の指摘はもっともであり、筆者も異論はない。一方で宇野は同古墳発見時の開正和の記録（開 2000）に関し、石室幅や石室の平面形に実際との齟齬があるとして、同記録に残る屍床仕切り石の存在を留保している。同記録は筆者が開のメモを借りて同人誌に掲載したものであるが、同古墳の石室規模や平面形の記述部分の直前に「土地所有者平野源治氏の言に依ります」という文言があることから（開前掲 p.39）、筆者は開が平野の証言を実際の石室で確認しないまま記録したため齟齬が生じたと理解している。したがって筆者は屍床仕切り石が当時存在したと認識している。であれば、なおさら同古墳と肥後型（石障系）横穴式石室との類似が際立ってくる。

黄金山古墳の石室の規模は長さ2.25×幅1.2¹で北の側壁は板石1枚で造られている。南のそれは失われ、板石の厚みも不明である。石室入口は横口式で、板石1枚の框石（かまちいし）（註3）を土留めとして立て、段状の構造物を造っている（註4）。段状の構造物の上端が通路のようになり、入口まで0.5²ほどである。入口には直立した板石の閉塞石が残る。框石と袖の張り出しの間には板状の袖石を袖の壁に貼り付けている。基底部分（下部構造）の上には板石を小口積みにし、天井部はアーチ状ないしドーム状をなすと想定されている。前述の開正和によると、敷石には玉砂利が用いられ、敷石も含め石室内には朱が塗られていたという（開前掲）。

宇野を始め重藤輝行など九州の研究者は黄金山古墳に類似した古墳として、肥後型（石障系）石室である熊本県八代市の大蔵尾張宮（おおそぞうおわりのみや）古墳をあげる（宇野 2013、重藤 2019）（第6図）。段状の構造物や板石の積み方など類似する点が多い。しかし相違点もあり、例えば大蔵尾張宮古墳の側壁の基底部分は平積みされた板石の壁で、その壁から独立して四方に石障を立て巡らしている。それに対して黄金山古墳の場合、小田報告にあるように側石を腰石として石積みをしている（写真1参照）。一方で大蔵尾張宮古墳に先行すると言われる小鼠蔵（こそぞ



写真1 黄金山古墳（小田 1979 より）

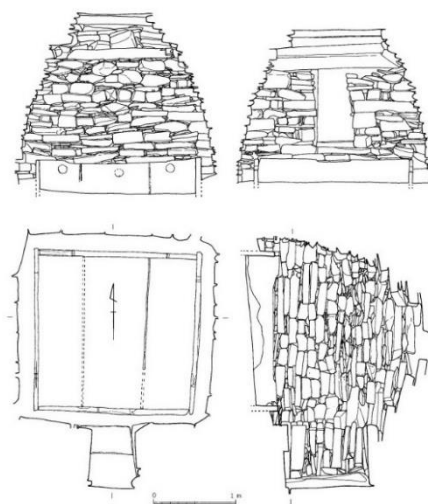
う) 1号墳は石障となる板石に接する形で側壁が積み上げられており(第7図)、やはり黄金山古墳の側壁の有り方とは異なる。さらに、小鼠蔵第1号古墳は石棺を伴っており、平面プランも大鼠蔵尾張宮古墳と同様に方形で、長方形の黄金山古墳とは異なる(註5)。このように3つの古墳が互いに類似点や相違点がある中で、筆者は黄金山古墳の主体部は小田が指摘するように当地独自の主体部であると考え。そのため箱形の構造物は箱式石棺のようでもあり、作りは粗いが肥後地方の石障のようにも見える(註6)。しかし、黄金山古墳の主体部の最大の特徴は石室と棺が一体化している点であり、両者が分離独立している北部九州型横穴式石室や肥後型(石障系)横穴式石室の影響は受けてはいるものの、それらとは本質的に異なると言わざるを得ない。

なお黄金山古墳の時期は前述の大鼠蔵尾張宮古墳が前方後円墳集成編年4期と5期の間に編年されているところからみて(第4図)同編年5期とみなし、実年代は5世紀前葉と判断した。

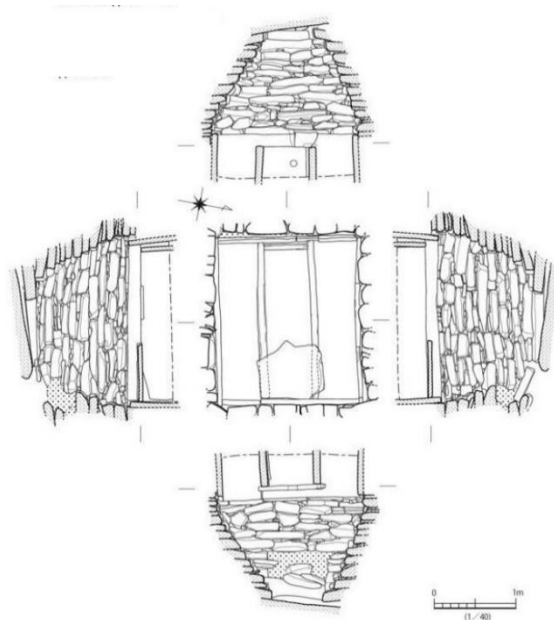
③佐世保鬼塚古墳(第8図)(第2図2)

佐世保市にある直径17mの円墳である。石室の下部構造は箱形の構築物で、平面形は長方形である。石室の規模は長さ1.85m、幅1.38m(奥壁側)と1.17m(羨道側)で、羨道と玄室の境には框石を置く。框石と直行して奥壁に向かって屍床仕切り石が設けられており、床面の敷石、玉砂利等は確認できない。奥壁及び側壁外側は未調査であるが、発掘調査報告書では「奥壁・側壁材の背後から天井部にかけて扁平に加工された流紋岩が持ち送り状に積み重ねられていたと推察される。」との記述があり(佐世保市教委編2019 p.14)、箱形構築物の裏には側壁があると見られる(註7)。石室入口北側には2枚の袖石があり、南側にはそれがない。築造時期は発掘調査報告書によると5世紀第2四半期とされる。佐

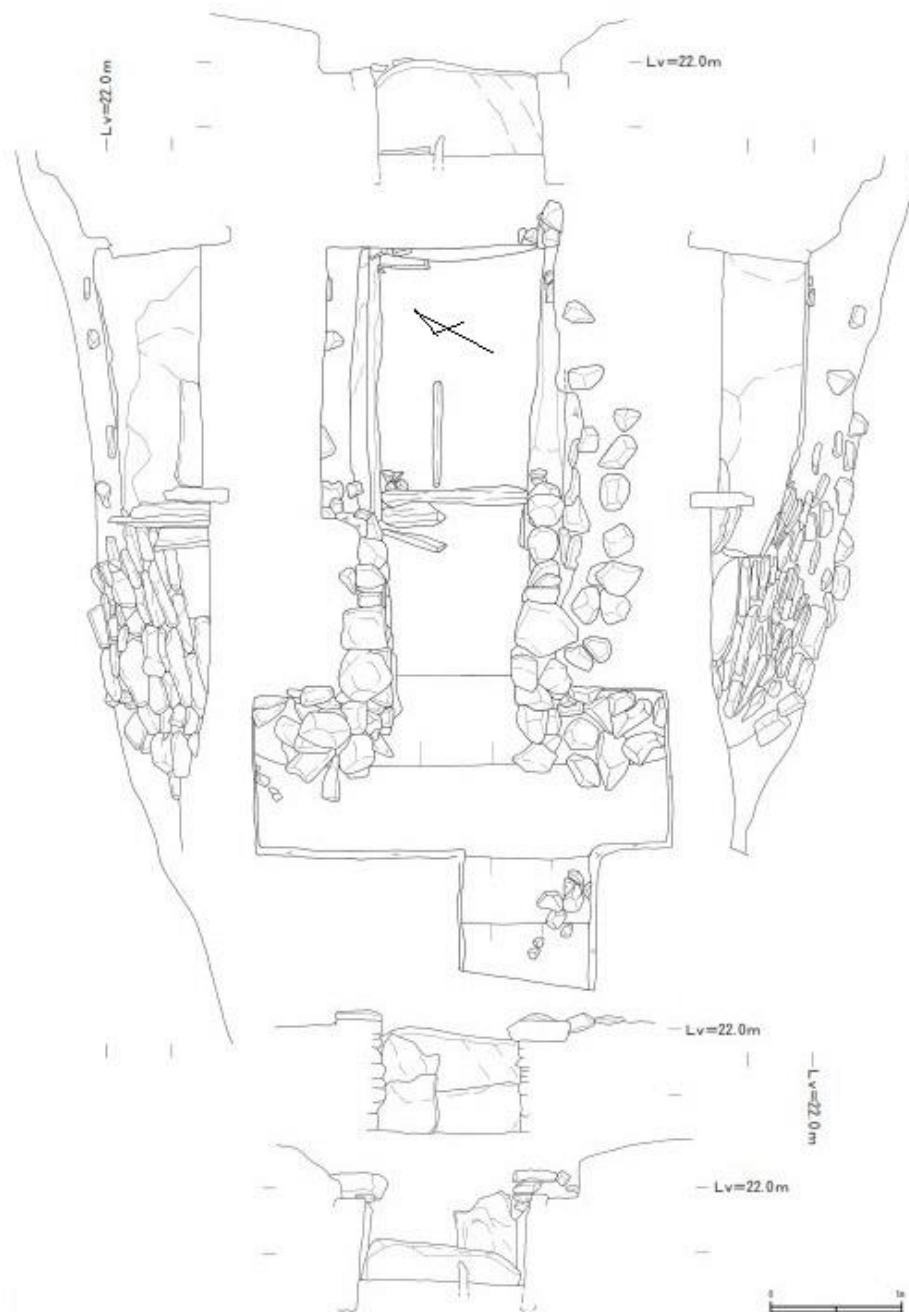
世保鬼塚古墳の石室の形式に関して、同古墳の調査指導にあたった橋本達也が佐賀県伊万里市の夏崎古墳(第9図)との類似を指摘しているが(橋本2018)、同古墳は重藤輝行によって初期横穴式石室のうちの筑肥型に比定されている(重藤2018)。筑肥型とはかつて柳沢一男が提唱した九州の初期横穴式石室の形式であり、「北部九州型と肥後型の折衷形式」(柳沢1993 p.90)とされる。



第6図 熊本県八代市大鼠蔵1号墳
(S=1/100)(熊本県教委編2020より)



第7図 熊本県八代市小鼠蔵1号古墳(熊本県教委編2020より)(S=1/100)



第8図 佐世保鬼塚古墳 (S=1/60) 佐世保市教委編2019より 一部改変

夏崎古墳と佐世保鬼塚古墳とでは屍床仕切り石の位置や袖石や框石の存在、石室の三方に石障を立てる点が類似する。しかし夏崎古墳には玄室床面と羨道床面に50°の段差があり、その点が異なる(柴元1971)。夏崎古墳の時期は重藤によると前方後円墳集成編年の第7期に編年されており(重藤2018)、実年代は5世紀中頃である(第4図)。

以上の黄金山古墳や佐世保鬼塚古墳は、前方後円墳ではなく円墳であることや、鉄製武器を副葬するなど共通点が多く、ひさご塚古墳などの前方後円墳被葬者より下位の地域有力者と推定されるが、彼らは北部九州や肥後など各地域の墓制を積極的に取り込んでおり、被葬者が生前、広域にわ

たって活動していたことが窺える。

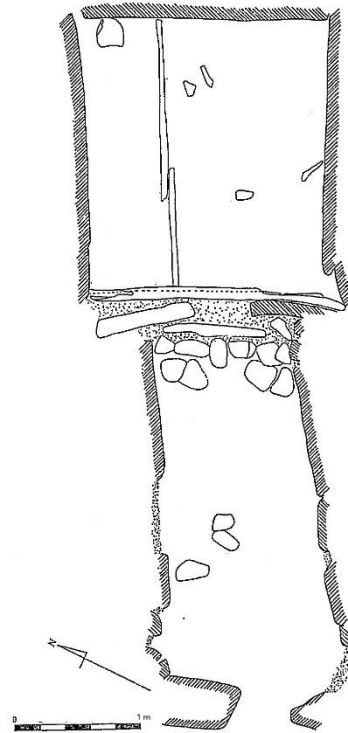
(2) 北部九州の影響が窺える古墳

ここからは北部九州の初期横穴式石室である竪穴系横穴式石室の影響を受けたと思われる当地の石棺系横穴式石室を検討する(註8)。

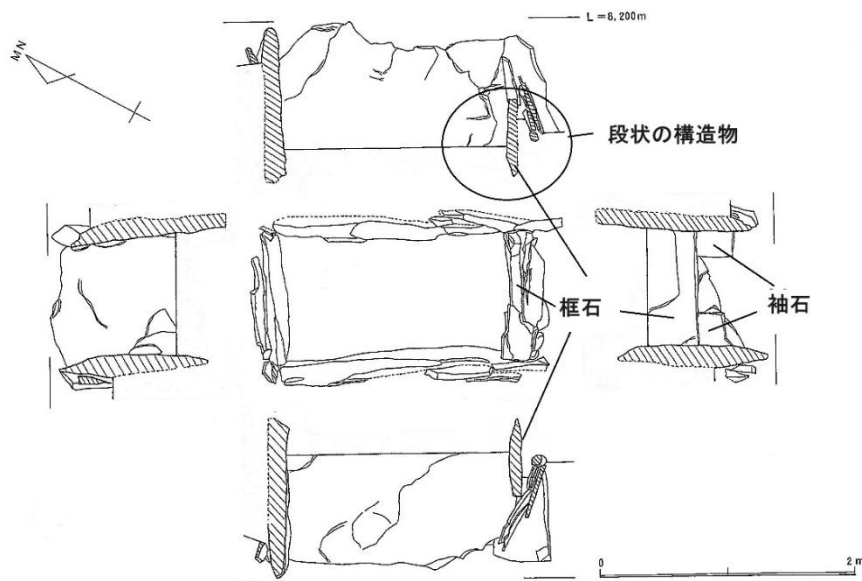
①ひさご塚古墳第2号石室(第10図)(第2図3)

東彼杵町にある長さ59^{メートル}の前方後円墳である(東彼杵町教委編1994)。石室の位置が墳丘主軸から外れており、後述する1号石室に従属するものか追葬と思われる。石室の長さ1.7^{メートル}、幅1.0^{メートル}を測る。横口部は黄金山古墳と同様に框石を配し段状の構造物を有し、石室入口は石室床面より1段高くしている。段の上端は黄金山古墳では短い通路となっていたが、ひさご塚2号石室では段の上端はさらに短く、10^{センチ}程度である。框石の外の両側に板石を立てて袖石としている。また外側から入口に向けて斜めに立て掛けた板石で入口を塞ぐ構造となっている。基底部(下部構造)から上の側壁は失われ、黄金山古墳のように板石を小口積みにした側壁かどうかはわからない。

天井部は黄金山古墳のように板石をドーム状に平積みしたかも知れないが、これまた不明である。側石に厚み

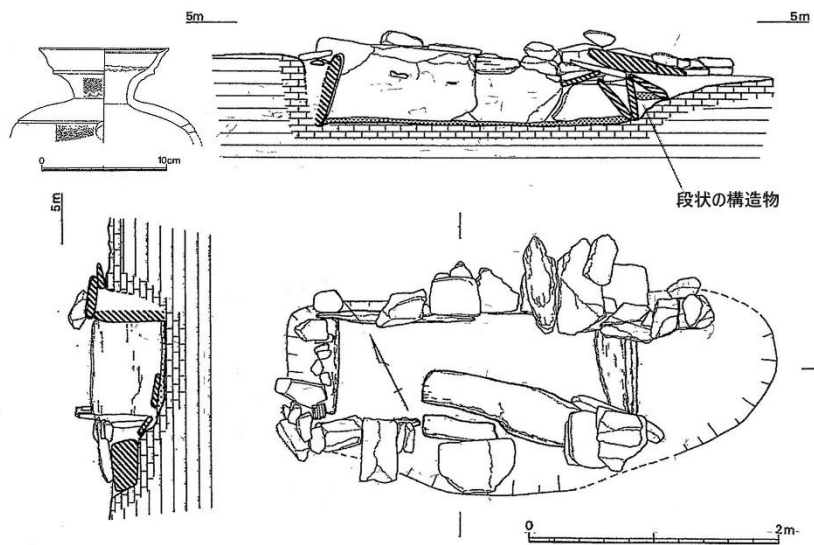


第9図 伊万里市夏崎古墳石室 (S=1/60)(柴元1971より一部改変)



第10図 ひさご古墳第2号石室 (S=1/60)(東彼杵町教委編1994より一部改変)

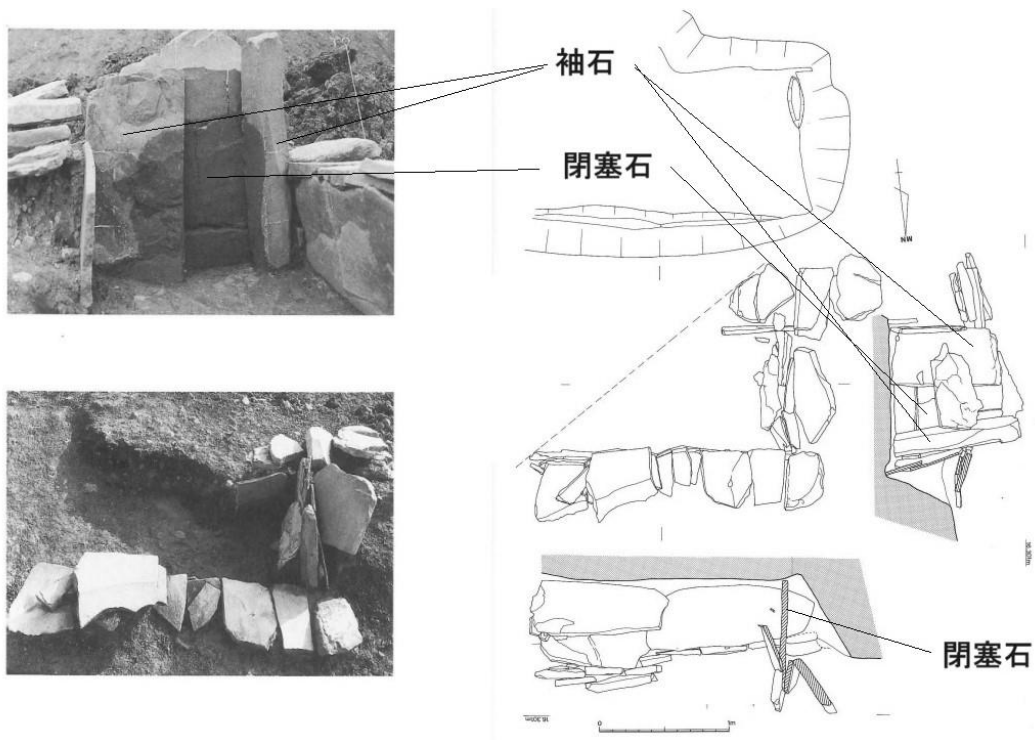
があって肥後型（石障系）横穴式石室の石障より箱式石棺の側石に近い。黄金山古墳の主体部と比較すると、框石を用いた段状の構造物の造作方法や袖石を配するところなど類似点が多いが、屍床仕切り石が存在しない点や、箱式石棺の側石に似た下部構造から、筆者は従来言われているように石棺系横口式石室の範疇とした方が良くと判断した。黄金山古墳の石室より簡素化や簡略化が窺え、同墳に後続する可能性が高い。



第11図 前島7号墳室 (S=1/60) と出土土器 (S=1/6) 時津町教委編1994

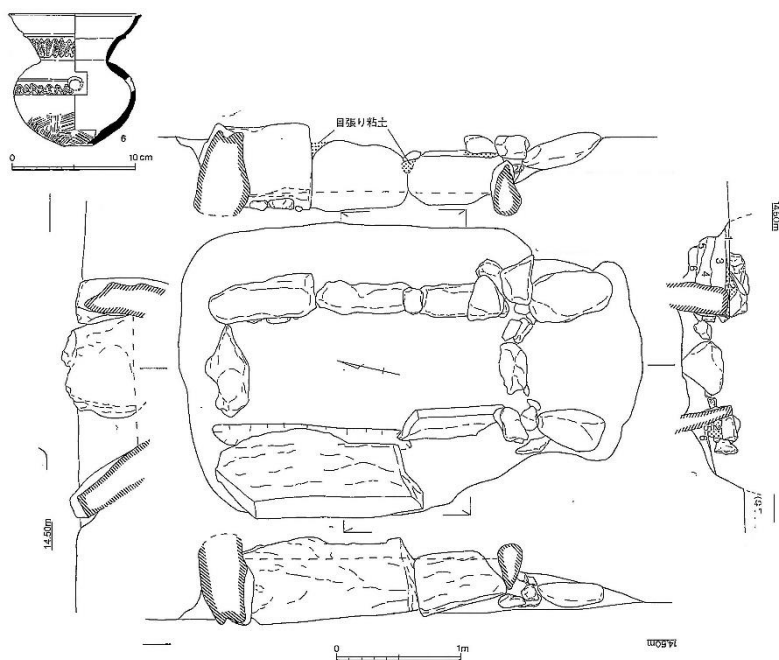
②前島7号墳 (第11図) (第2図4)

時津町にある直径7メートルほどの円墳である (時津町教委編1994)。石室の下部構造は幅12~13センチほどの板石で組まれた箱形の構造体である。石室の内法は長さが2.2メートル、幅が0.9メートルで、横口部は板石を2枚立てて框石とし、段状の構造物を造っている。框石を土留めのように用いて段状の構造



第12図 中江18号墳 (S=1/60) (高来町教委編1993より 一部改変)

物を造る点は黄金山古墳主体部や、ひさご塚古墳第2号石室と同様である。段状の構造物の上端は0.4m程で、石室床に敷かれていた石英の小円礫の層が確認されている。この小円礫層の存在によって石室入口の床が石室内の床より一段高くなっていたことが分かる。西側には地山を削って横口部分まで傾斜をつけた前庭部と思われる部分を付設している。また、棺床には前述のように石英の



第13図 一野1号墳 (S=1/60) と出土土器 (S=1/6) 有明町教委編 2001

小円礫を厚さ5cm程敷き詰めている。同墳の積み石は控えをとらず、側石の直上から割石を数段積み上げることで棺内空間を拡張させている。石室の時期は副葬された須恵器がTK216からTK208であるため(第11図)、5世紀中頃と考えられる(第4図)。

③中江18号墳(第12図)(第2図5)

諫早市にあったが不時発見のため墳丘の規模などは不明である(高来町教委編1993)。下部構造は厚さ10cmほどの板石を組み合わせた箱形の構造体である。報告書では石棺系石室となっているが、板石の閉塞石があるところから筆者は石棺系横口式石室と判断した。実測図の断面図に袖石が反映されていないため、横口部の検討が十分できない点が惜しまれる。写真を見る限り段状の構造物はなく、板状と方柱状の袖石があり、そこを板石で閉塞している。このような横口部の袖石は後述する曲崎10号墳などと共通するもので、当地の小型の横穴式石室にも踏襲される。石室規模は長さ2.1m強、幅0.9mである。床面には敷石等は見られない。時期を特定できる遺物の出土はないが、段状の構造物がないことや、横口部の袖石の有り方からすると5世紀後半の可能性が高い。

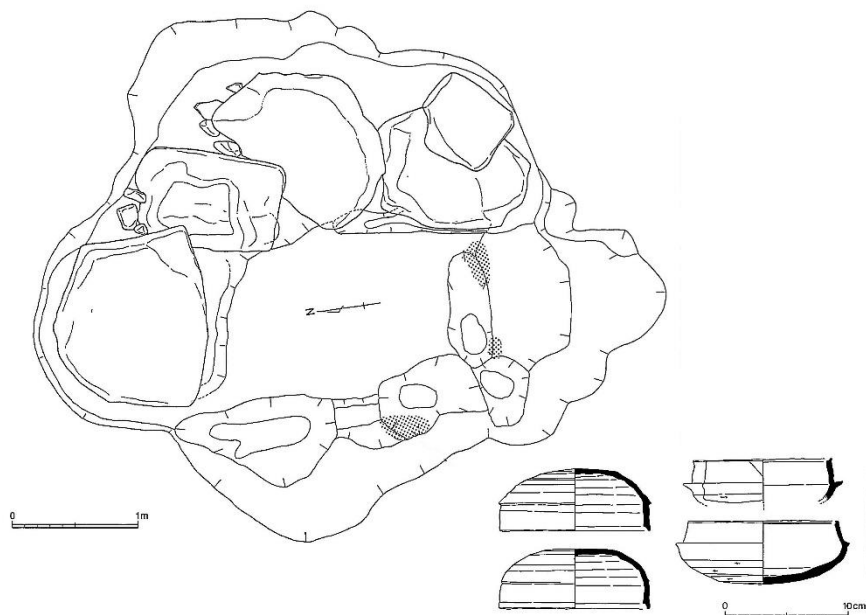
④一野1号墳(第13図)(第2図6)

島原市にあった直径1.1mほどの円墳である(有明町教委編2001)。石室の下部構造は扁平な石材と板石で三方を囲んだ箱形の構造体である。石室規模は長さ2.1m幅0.75mで、石室平面形は長方形である。石室は東側の側石は3石で厚さ30~50cmの扁平な石を腰石に用い、粘土で目張りしている。西のそれは2石で、厚さ20cmほどの板石を用いている。床に礫などは敷かれていない。框石は存在するが閉塞石は残っていない。段状の構造物は見られず、袖石もはっきりしない。石室入り口に至る地山が緩傾斜であること以外は、本県本土部で見られる小規模な横穴式石室と言ってよい。実際、東側石の石材は西側石の石材より厚みがあり、石室入口の石は前庭部に向かって開いており、いわゆる「只字状」を呈する。これらの特徴も本県本土部の小規模な横穴式石室に類

似する。したがって本石室は石棺系横口式石室と考えるが、随所に当地の小規模な横穴式石室の特徴を併せ持つ。石室の時期は周溝からTK23の須恵器ハソウが出土しているところから見て(第13図)5世紀の後半である(第4図)。

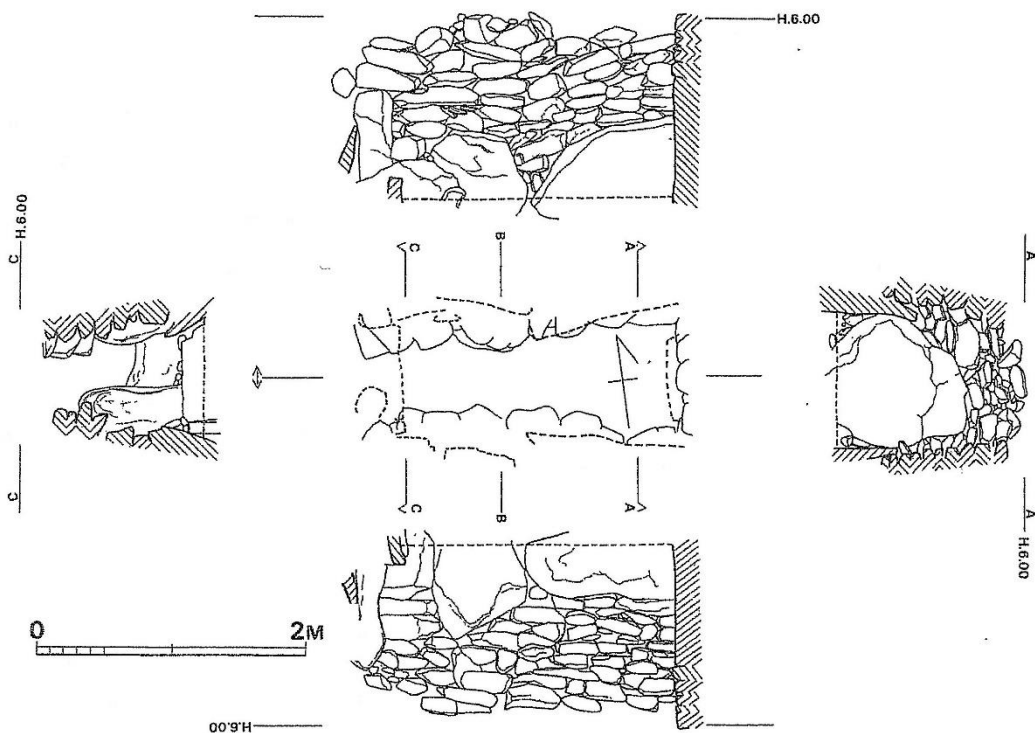
⑤一野3号墳(第14図)(第2図6)

(有明町教委編2001)



第14図 一野3号墳(S=1/60)と出土土器(S=1/6) 有明町教委編2001

島原市にあった直径11メートルほどの円墳である。攪乱により詳細は不明であるが、復元された石室規模は2.1×1.36メートルである。断面図が掲載されていないので確実ではないが、平面図を見ると前庭部のような緩斜面が認められるので、1号墳と同様の石棺系横口式石室と推定される。1号墳



第15図 曲崎2号墳(S=1/60)(長崎市市教委編1978より一部改変)

(第13図)に用いられた石材より大きいものが使用され、本県本土部の小規模な横穴式石室の石材に近い。周溝より出土したTK23からTK47の須恵器から(第14図)5世紀後半の時期と判断した(第4図)。

⑥曲崎2号墳(第15図)(第2図7)

長崎市の牧島にある積石塚である(長崎市教委編1978)。長さ1.9m、幅1~0.9mを測る。

横口部は方柱状の石を立てて袖石とし、袖石間には板石を立てた框石がある。このような横口部の有り方は本県本土部では類例が多い。

石室の下部構造は側石間に隙間があり、石棺状の側石というより、九州の横穴式石室に見られる腰石に近い。横穴式石室の影響を受けた石棺系横穴式石室である。出土遺物がわずかなため時期の特定が難しいが、6世紀代であろう。

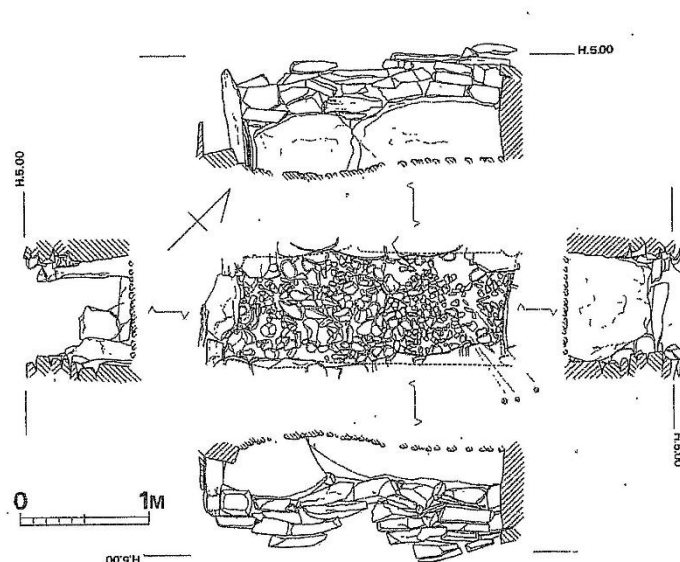
⑦曲崎3号墳(第16図)(第2図7)

石室の長さ2.5m、幅0.8mを測る。横口部は2号墳と同様に袖石と框石をもつ。袖石の外側には閉塞石が半分ほど残存した形で残っている。下部構造は石棺状の構造体である。出土品は玉類のみで、時期が特定できる遺物はない。

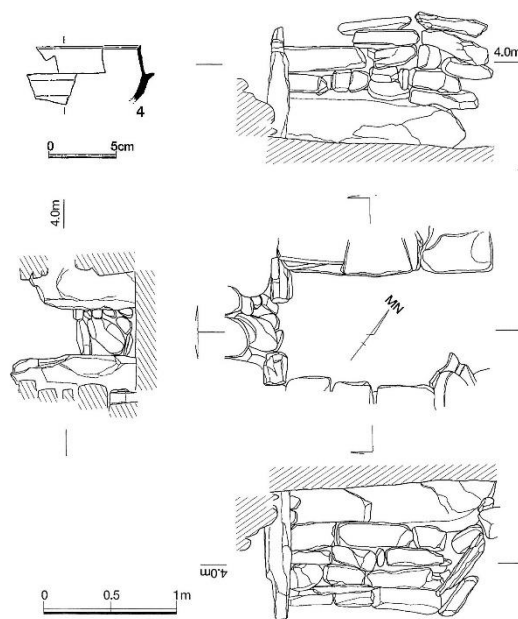
⑧曲崎10号墳(第17図)(第2図7)

半壊しているが横口部が遺る。石室の長さは不明で、幅は0.8mである。石室の基底は扁平な石を横長に用いて、その上に割石を数段積んでいる。横口部は扁平な石と方柱状の石を縦に置いて袖石にしており、前述したように本県本土部の小型の横穴式石室によく見られる特徴をもつ。主体部内部よりTK47の須恵器が出土しており

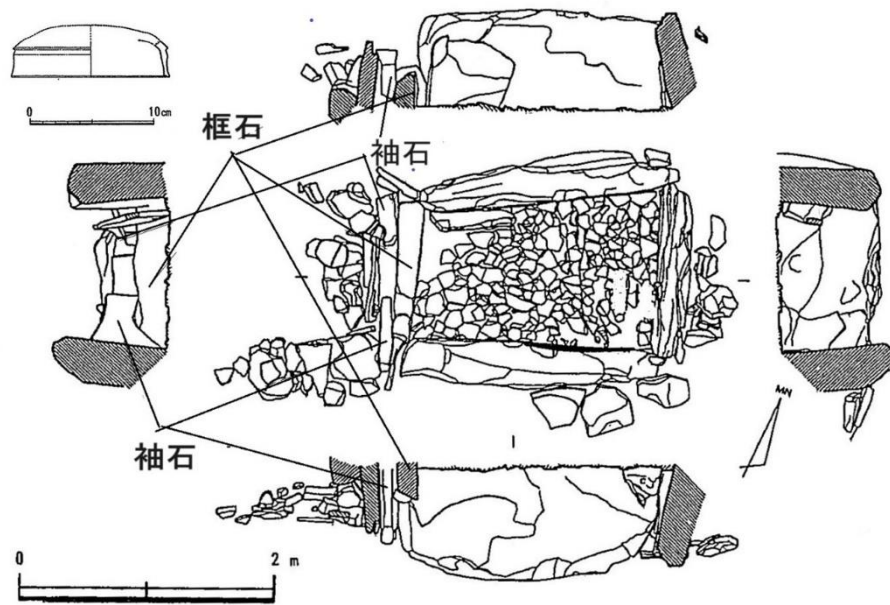
(第17図)、5世紀末の築造と考える(第4図)。



第16図 曲崎3号墳(S=1/60)(長崎市教委編1978より一部改変)



第17図 曲崎10号墳石室(S=1/60)と出土土器(S=1/6)長崎市教委編2002より



第18図 小野古墳 (S=1/60) と出土土器 (S=1/6) (諫早市教委編 1978 より 一部改変)

小野古墳 (第18図) (第2図10)

小野古墳は諫早市にあって、不時発見され、調査後に現地保存に至った古墳である (諫早市教委編 1978)。調査担当者は石室形式の特定を留保しているが、同墳を石棺系横口式石室と最初に指摘したのは宇野慎敏である (宇野 2018)。狭長なプランで、框石を配し、板石を両袖石として立て、さらに板石で閉塞している。羨道や前壁が無いこと、横口部を板石で閉塞していることなどの横口式石室の特徴から石棺系横口式石室としてよい。前庭部が「只字」状を呈するところは横穴式石室からの影響が窺える。築造時期は、発掘調査報告書では6世紀前半とされ、宇野慎敏も同時期と見ている (宇野前掲)。

ここからは筆者なりに同古墳の築造時期を考察する。副葬された鉄剣は池淵俊一のカテゴリでは浅直・斜角関中細茎の長剣で (池淵 1993)、池淵によるとこの型式の長剣は5世紀中葉に出現し、長剣自体が6世紀初頭には殆ど認められなくなるという。さらに同古墳の周辺より採集された須恵器の坏蓋がMT15とみられ (第18図)、その実年代は6世紀第1四半期である (第4図)。鉄剣と須恵器の年代に齟齬があるが、鉄剣は伝世したと考え、同古墳の築造時期は6世紀前葉と判断する。本県本土部の石棺系横口式石室の下限もこの頃と考えられる。

以上のように古墳時代中期の本県本土部の石棺系横口式石室は、いずれも基底部に板石を立て箱形の構造体を造り、側石の上端から控えを採ることなく直接、塊石や割石を積み上げることによって棺内空間を拡張する構築法を用いている。5世紀前半のひさご塚第2号石室や前島7号墳は横口部の造作が黄金山古墳のそれに類似しており、石室構築法の伝承と拡散が窺える。しかし5世紀後半になると、一野1号墳や同3号墳のように石室構築法の簡略化や簡素化が行われるようになり、後続する5世紀末の曲崎10号墳や6世紀前葉の小野古墳では横穴式石室への移行や変化のきざしが見られる。

4 長崎県本土部の石棺系石室

ここからは本県本土部で見られる古墳時代中期の石棺系石室をとりあげる。下部構造が前代の箱式石棺のような箱形の構造体で、その上に堅穴式石室のような石積みあり、横口部がないことが特徴である。

なお九州地方には「石棺系」と冠された小型の石室が多く確認されているが、その嚆矢となったのは1974年に山中英彦が提唱した「石棺系石室」である(山中1974)。

山中が提唱した「石棺系石室」は「箱式石棺を母胎として堅穴式石室を受容した石室」(山中前掲p.26)である。その構造は「板石を箱式石棺状に頭部を幅広くして立て、石室

の腰石としその上に石材を横積みする。土坑壁と石室側壁との間隔は共通して狭く、一般に控え積みをしなない」石室のことを指す(山中前掲 P.25)。一方で中間研志は明らかに堅穴式石室から変化したものを石棺系堅穴式石室と呼称し、山中の石棺系石室との差別化を図った(中間1986)。

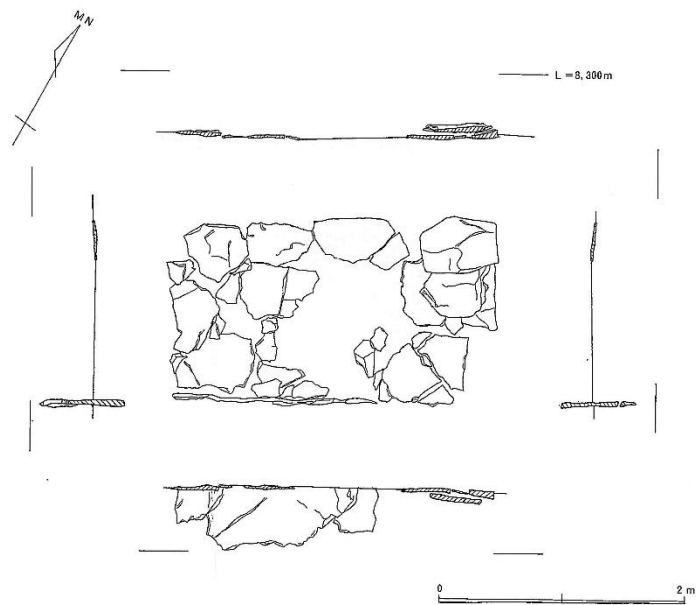
両者の学説を蒲原宏行が整理している。蒲原によると山中の石棺系石室は「箱式石棺状に四壁に板石を立て、その上に石材を数段横積みにした石室」であり、中間の石棺系堅穴式石室は「石棺系石室と同程度の規模であるが、側壁を基底部より割石小口積みまたは塊石積みによって構築するものを指す。小口壁は石棺系石室同様板石を立て、その上に割石等を積んだりしている」とした(蒲原2019 p.468)。蒲原の整理に従えば、本県本土部の小規模な堅穴系の石室は山中の石棺系石室の範疇であり、本稿でもそれに準ずる。

なお、当地の同石室はさらに細分できる可能性があるが、今後の課題としたい。

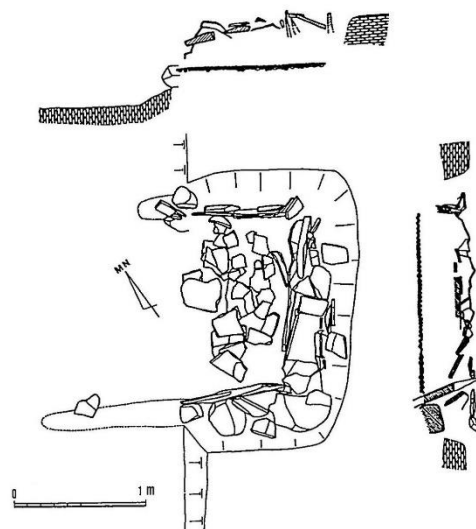
以下、当地の石棺系石室を概観する。

①ひさご塚古墳第1号石室(第19図)(第2図3)

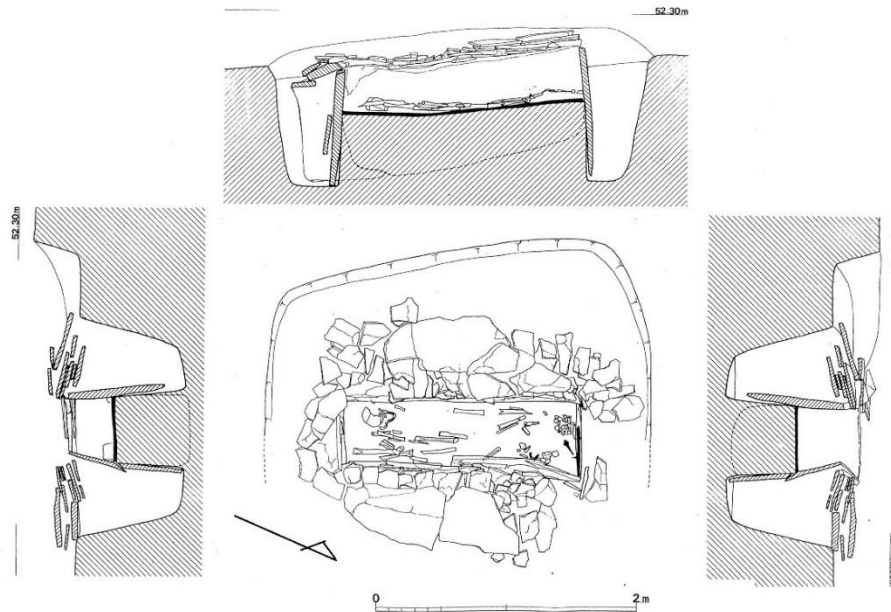
東彼杵町にある長さ59mの前方後円墳で、主埋葬である(東彼杵町教委編1994)。盗掘による石室の破壊が著しく、床面と側石の一部しか遺っていないが、下部構造は厚さ5.6cmの板石を方形に並べた幅広の箱形の構造体である。石室規模は長さ2.7m、幅1.5m、石室平面形は長方形で、敷石がある。上部構造は不明である。幅が1.5mと通常の堅穴系横口式石室より広く、羨道や横口部が確認できないため、石棺系石室と考える。時期は第2号石室同様、黄金山古墳に次ぐ5世紀前葉の時期と考える。



第19図 ひさご塚古墳第1石室(S=1/60) 東彼杵町教委編
1994より 一部改変



第20図 久津石棺A地点石棺(S=1/60)
長崎県教委編1978より 一部改変



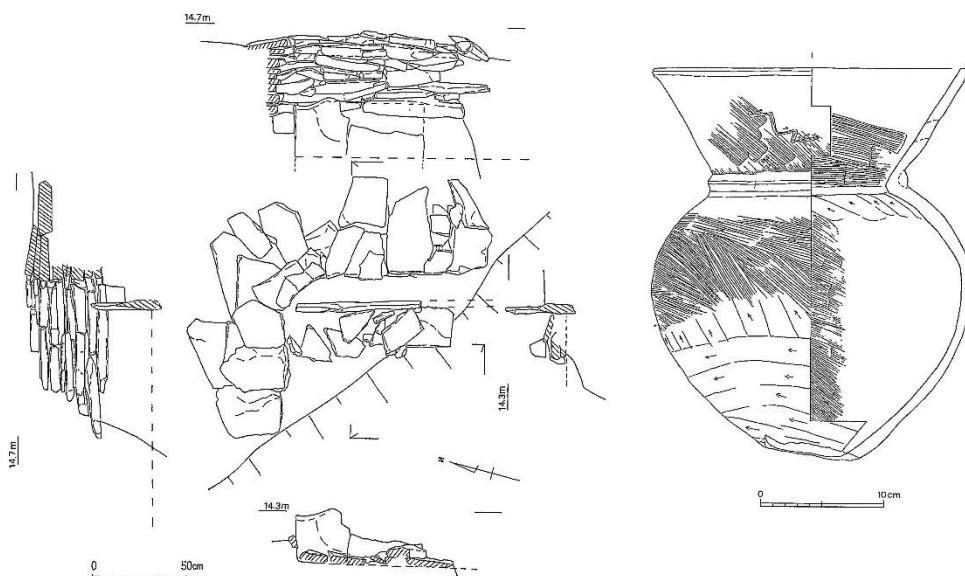
第21図 小佐古石棺墓群B地点1号石棺 (S=1/60) (大村市教委編1988より一部改変)

②久津石棺A地点石棺 (第20図) (第2図8)

大村市にある古墳で墳丘規模などは不明である (長崎県教委編1978)。下部構造は厚さ10センチほどの板石を組んだ箱形の構造体である。攪乱を受けて半分は欠損している。石室規模は長さ推定2メートル、幅1.5メートルで石室平面形は長方形である。石室床面は小玉石を敷く。石室幅が広いので、石棺系横口式石室ではなく、石棺系石室と判断した。時期は不明だが、古墳時代中期前半であろう。

③小佐古石棺墓群B地点1号石棺 (第21図) (第2図11)

大村市にあった石棺系石室である (大村市教委編1988)。下部構造は箱式石棺で側石は西に1枚、東は3枚で造られており、側石の上に板石を数段積んでいる。棺は長さ1.8メートル、幅0.5メートルを測る。床には小豆大の砂利が敷かれ、棺内には朱が一面に塗布されていた。築造時期は副葬された鉄



第22図 一野5号墳 (S=1/40) と出土土器 (S=1/6) 有明町教委編2001より

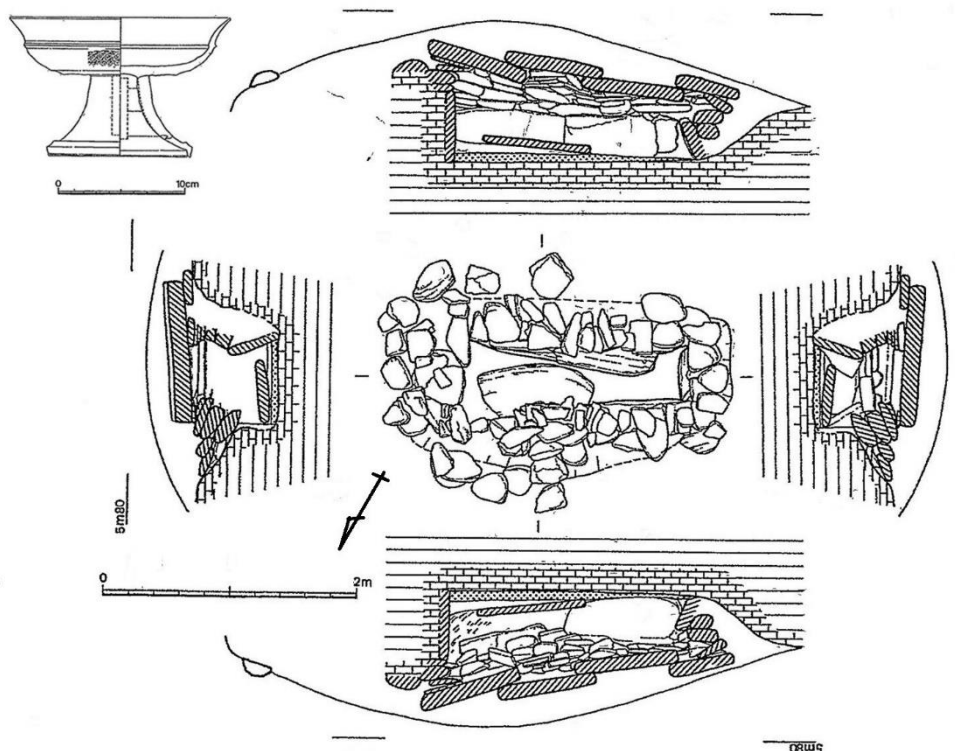
剣が池淵分類の直茎bのナデ角関aの短剣で4世紀後葉から5世紀中葉とされ（池淵1993）、石棺群の墓前祭祀に用いられた土器が5世紀代であったので（古門2022）、5世紀前半と判断した。

③一野5号墳（第22図）（第2図6）

島原市にある円墳で、下部構造は幅5㍍ほどの板石を方形に組んだ石棺状の箱形の構造体である（有明町教委編2001）。石室規模は残存部で長さ1.1㍍幅0.85㍍である。石室は一見したところ箱式石棺を埋葬した竪穴式石室の印象であるが、子細に見ると、板石を小口積みした側壁は墓坑底部から積み上げたものではなく、墓坑底部から20㍍ほどの墓坑肩から積み上げられている。（有明町教委前掲）石室コーナーを隅丸に積むなど竪穴式石室との相違点が顕著である。これまで見てきた当地の石棺系石室の場合、下部構造との間に控えをとることなく石積みしているのに対し、箱形の構造体から控えをとって、そこから壁石を積み上げている点が異なる。周溝より壺形土器が出土していることも特異な点である（第22図）。この壺形土器を壺形埴輪と見る向きもあるが、発掘調査報告書によると焼成後に穿孔されており、同埴輪からは除外すべきと考える（竹中2004）。発掘調査報告書では壺形土器の時期を4世紀末としているが、筆者は林田編年3期（5世紀中頃TK216 TK208 併行）と考える（林田2002）。

④前島6号墳（第23図）（第2図4）（時津町教委編1994）

時津町にある直径5㍍の円墳である。下部構造は幅15㍍ほどの板石を組み合わせた石棺状をなす。石室規模は内法で長さ1.9㍍、幅が東側で0.7㍍、西側で0.4㍍である。主体部は両側石とも2枚の結晶片岩の板石によって構成され、その上に数段の小口積みを行なっている。側石上に控えをとることなく、4、5段肩平な板石を小口積みにし、棺内空間（容積）を拡張している。天井石は4枚の板石を交互に乗せており、棺床には石英の礫が5cm程敷き詰められていた。TK216からTK208の須恵器高坏が墳丘裾から出土したところから（第23図）5世紀中頃の時期と考える（第4



第23図 前島6号墳 (S=1/60) と出土土器 (S=1/6) 時津町教委編1994より

図)。

⑤曲崎古墳 22 号墳

(第 24 図) (第 2 図

7) (長崎市教委編

2002)

長崎市の牧島にある積石塚古墳である。内部主体は石棺系石室で、長さ 1.7 ム、幅 0.8 ムを測る。両側壁ともに 2 石の割石を横長に用いている。遺物は出土していない。

⑥曲崎古墳 34 号墳

(第 25 図) (第 2 図

7) (長崎市教委前掲)

長崎市牧島にある積石

塚古墳である。小形の石棺系石室で長さ 1.3 ム、最大幅 0.5 ムを測る。出土遺物がないため時期は特定できない。

⑦曲崎古墳 101 号墳 (第 26 図) (第 2 図 7) (長崎市教委前掲)

長崎市牧島にある積石塚古墳である。長さ 1.8 ム、幅 0.5 ムの石棺系石室である。両側石は 2 石の割石を横長に用いている。出土遺物は無く、時期が不明である。

以上の曲崎古墳群の 22、34、101 号墳は遺物が出土していないので時期判定が難しいが、諸状況からして 5 世紀後半としておく。

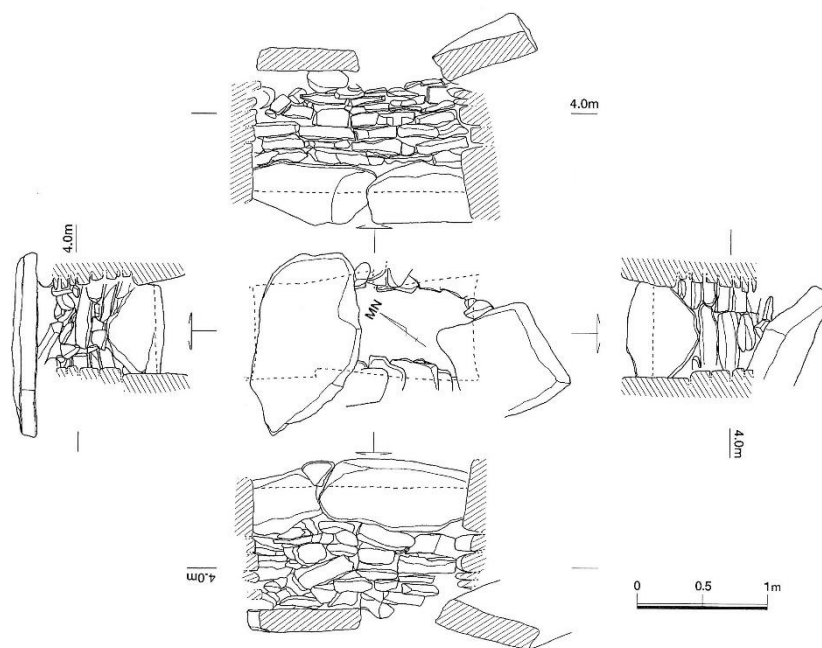
⑧下釜 1 号墳 (第 27 図) (第 2 図 12)

下釜石棺群は諫早市飯盛町に所在する積石塚古墳である。前述の曲崎古墳から直線距離で 4 ㌔の場所にあり、同じく砂州に形成された礫丘上に立地する。1 号墳の石室は長さ 1.73 ム、最大幅 0.55 ムで、清掃調査担当者は「大ぶりの平石を側石として大形の石棺を形成した後、その側石の上に海浜円礫等を積上げて石室を作り上げている。」(飯盛町教委編 1995 p7) と記し、同石室の特徴を的確に報告している。

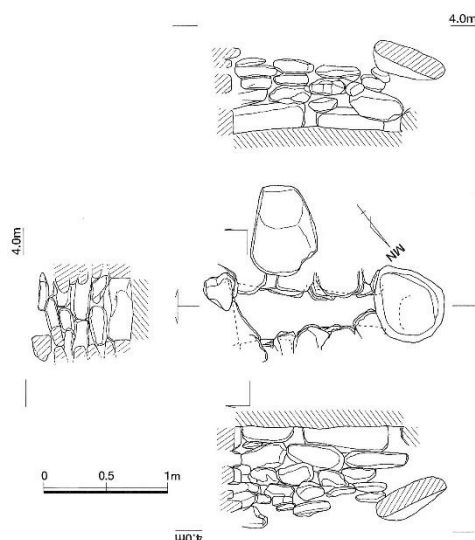
⑨下釜 2 号墳 (第 28 図) (第 2 図 12)

1 号墳の石室と同様に石棺状の構造体を腰石として、その上から海浜の石塊や礫を積み上げている。長さ 2.05 ム、最大幅 0.84 ムを測る。

下釜石棺群の石室は基底部に石棺状の構築物を設置し、その上に積み石を行っており、類似



第 24 図 曲崎 22 号墳 (S=1/60) 長崎市教委編 2002 より

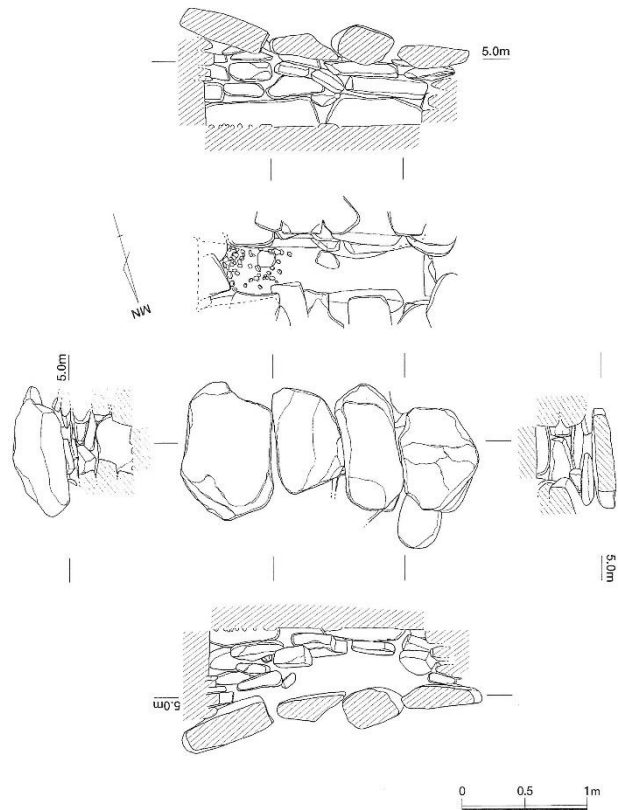


第 25 図 曲崎 34 号墳 (S=1/60) 長崎市教委編 2002 より

した立地も相まって曲崎古墳の石棺系石室にきわめて類似する。したがってその築造時期も5世紀後半と考えられる。

⑩松ヶ崎古墳（第29図）（第2図9）

佐世保市針尾島にあった直径6mほどの円墳で、果樹園造成による不時発見であった（佐世保市市長室調査課編1982）。下部構造は砂岩の板石を箱状に組んだ構造物である。石室は5世紀のものと思われるが、石室内から口縁部が外反する土師器の甕形土器が出土したことを根拠に公には6世紀後半から7世紀前半とされている（佐世保市市長室調査課編1982）。筆者はこの土器は石室に伴うものではないと見ており、本墳は5世紀の石棺系石室と考える。



第26図 曲崎101号墳 (S=60)
長崎市教委編2002より

以上のように本県本土部の石棺系石室は従来の箱式石棺の規模の拡大を意図して造られているもの（ひさご塚1号、久津石棺A、一野5号）と、旧来の箱式石棺と同規模のもの（小佐古石棺墓群B地点1号、前島6号、曲崎22、34、101号、下釜1、2号）が見られる。将来的には形式を分け、新たな名称を用いることも考慮する必要があると考える。

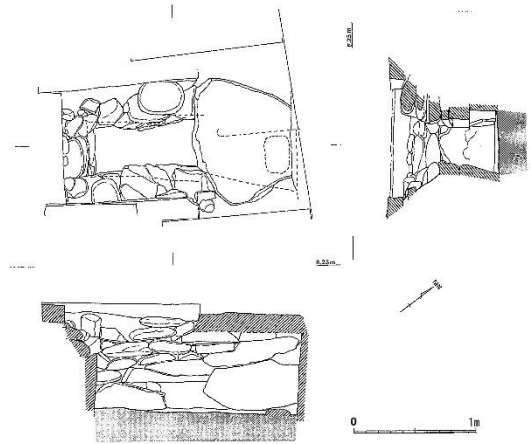
5 本県本土部の古墳時代中期古墳の属性

ここからは本県本土部の初期横穴式石室と石棺系横口式石室および石棺系石室の属性をさらに検討していく。

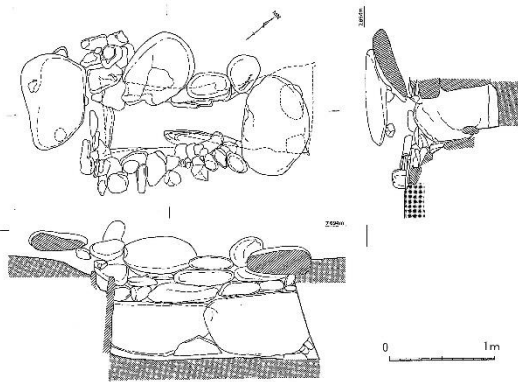
(1) 石室規模

第30図は本県本土部の初期横穴式石室と石棺系横口石室および石棺系石室を石室面積で示したものである。

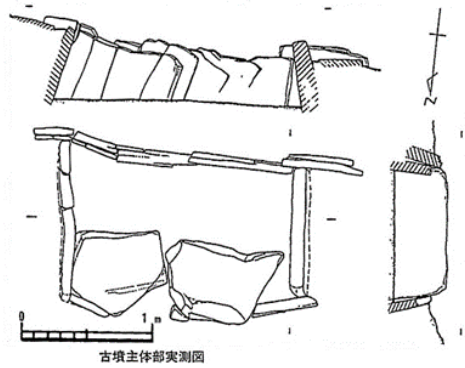
最大規模の石室は、ひさご塚古墳の第1号石室で、続いて黄金山古墳、久津A地点石棺の順である。久津A地点石棺はその規模から考えて、宇野が説くように地域の有力首長の墳墓と評価した方が良く考える。



第27図 下釜1号墳 (S=1/60)
飯盛町教委編1995より



第28図 下釜2号墳 (S=1/60)
飯盛町教委編 1995 より

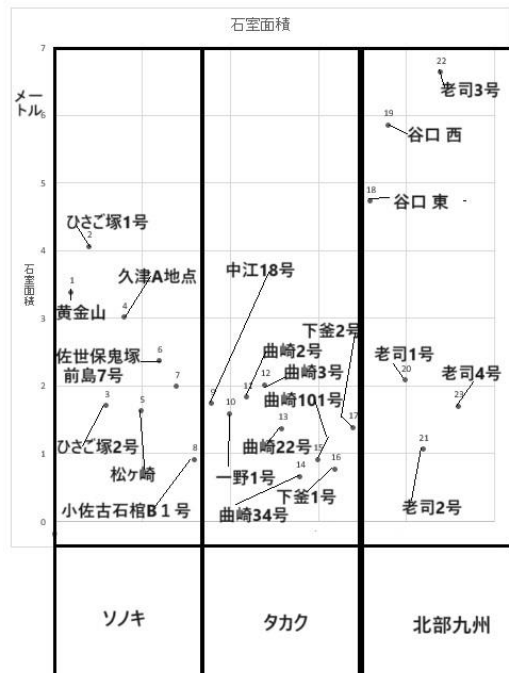


第29図 松ヶ崎古墳 (S=1/60)
佐世保市市長室調査課編 1982 より

したがってソノキの古墳時代中期初頭は、前方後円墳のひさご塚古墳の被葬者を社会階層の最上位として黄金山古墳や久津A地点石棺被葬者が、それに次ぐ上位の地位を占めるという社会階層であったと推測する。

一方、石室規模が小さい石棺系横口式石室である前島7号墳、一野1号墳、曲崎2、3、10号墳などは古式群集墳（初期群集墳）の中に造営されており、石棺系横口式石室が有力者の社会階層上位者から同下位者へ普及するに伴って小形化したものと考えられる。さらにソノキに石室面積が大きい古墳が集中することやタカクのそれが古墳時代中期中頃以降の時期であるところから見て、当地の石棺系横口式石室はソノキからタカクへ伝播し、小型化したものと推測する。なぜかマツラやヒラには及んでいない。なお石棺系石室も石棺系横口式石室と同様に前方後円墳のひさご塚古墳で採

No.	種別	古墳名	玄室長	玄室幅	玄室面積
1	石棺系横口式石室	黄金山古墳	2.25	1.2	3.275
2	石棺系石室	ひさご塚1号墳	2.7	1.5	4.05
3	石棺系横口式石室	ひさご塚2号墳	1.7	1	1.7
4	石棺系石室	久津A地点石棺	2	1.5	3
5	石棺系石室	松ヶ崎古墳	1.8	0.9	1.62
6	筑肥型横穴式石室	鬼塚古墳	1.85	1.275	2.35875
7	石棺系横口式石室	前島7号墳	2.2	0.9	1.98
8	石棺系石室	小佐古石棺群B地点1号	1.8	0.5	0.9
9	石棺系横口式石室	中江18号墳	1.92	0.9	1.728
10	石棺系横口式石室	一野1号墳	2.1	0.75	1.575
11	石棺系横口式石室	曲崎2号墳	1.92	0.95	1.824
12	石棺系横口式石室	曲崎3号墳	2.5	0.8	2
13	石棺系石室	曲崎22号墳	1.7	0.8	1.36
14	石棺系石室	曲崎34号墳	1.3	0.5	0.65
15	石棺系石室	曲崎101号墳	1.8	0.5	0.9
16	石棺系石室	下釜1号墳	1.73	0.44	0.7612
17	石棺系石室	下釜2号墳	2.05	0.67	1.3735
18	初期横穴式石室	谷口古墳東石室	2.95	1.6	4.72
19	初期横穴式石室	谷口古墳西石室	3.16	1.85	5.846
20	竪穴系横口式石室	老司古墳1号石室	2.14	0.97	2.0758
21	竪穴系横口式石室	老司古墳2号石室	1.75	0.6	1.05
22	竪穴系横口式石室	老司古墳3号石室	3.23	2.05	6.6215
23	竪穴系横口式石室	老司古墳4号石室	2.25	0.75	1.6875



第30図 石室面積の散布図

用された後に拡散し、階層下位の地域有力者の埋葬施設になっていったと想定される

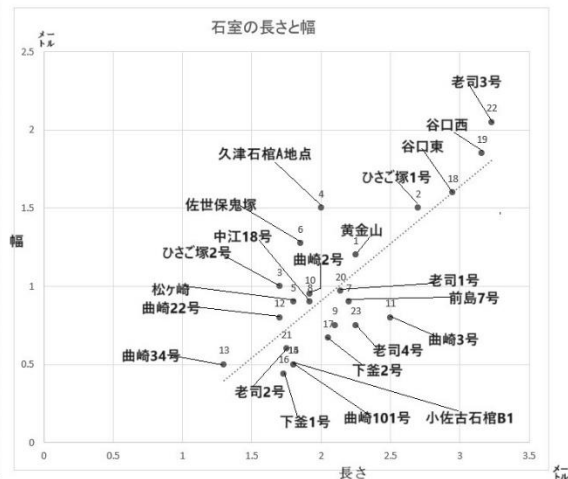
(2) 石室の平面形と長幅比

第31図は当地の初期横穴式石室ならびに石棺系横口式石室と石棺系石室の幅と長さを示したものである。宇野が指摘したように黄金山古墳、ひさご塚古墳の各石室と初期横穴式石室である佐賀県唐津市の谷口古墳の東西両石室の長幅比は0.5~0.58前後と極めて類似した数値を示し(宇野2013)、第31図の近似曲線上に分布する。これは偶然の一致ではなく、それぞれに共通した範型があったと見るのが自然であろう。

(3) 分布

本県本土部の初期横穴式石室や石棺系横口式石室さらに石棺系石室の分布を見ると(第2図)、前述のようにマツラやヒラに分布していないことが見て取れる(註9)。なぜマツラやヒラに分布しないのか、さらにタカクではなぜその出現が遅れるのか。これらの問いに対し、筆者は適切な回答を

No.	種別	古墳名	玄室長	玄室幅	長幅比
1	石棺系横口式石室	黄金山古墳	2.25	1.2	0.533333333
2	石棺系石室	ひさご塚1号墳	2.7	1.5	0.555555556
3	石棺系横口式石室	ひさご塚2号墳	1.7	1	0.588235294
4	石棺系石室	久津A地点石棺	2	1.5	0.75
5	石棺系石室	松ヶ崎古墳	1.8	0.9	0.5
6	筑形型横穴式石室	鬼塚古墳	1.85	1.275	0.689189189
7	石棺系横口式石室	前島7号墳	2.2	0.9	0.409090909
8	石棺系横口式石室	中江18号墳	1.82	0.9	0.49875
9	石棺系横口式石室	一野1号墳	2.1	0.75	0.357142857
10	石棺系横口式石室	曲崎2号墳	1.82	0.95	0.494791667
11	石棺系横口式石室	曲崎3号墳	2.5	0.8	0.32
12	石棺系石室	曲崎22号墳	1.7	0.8	0.470588235
13	石棺系石室	曲崎34号墳	1.3	0.5	0.384615385
14	石棺系石室	曲崎101号墳	1.8	0.5	0.277777778
15	石棺系石室	小佐古石棺墓群B地点1号	1.8	0.5	0.277777778
16	石棺系石室	下釜1号墳	1.73	0.44	0.25433528
17	石棺系石室	下釜2号墳	2.05	0.87	0.326829268
18	初期横穴式石室	谷口古墳東石室	2.85	1.8	0.542272881
19	初期横穴式石室	谷口古墳西石室	3.18	1.85	0.58443038
20	竪穴系横口式石室	老司古墳1号石室	2.14	0.97	0.45271028
21	竪穴系横口式石室	老司古墳2号石室	1.75	0.8	0.342857143
22	竪穴系横口式石室	老司古墳3号石室	3.23	2.05	0.634674923
23	竪穴系横口式石室	老司古墳4号石室	2.25	0.75	0.333333333



第31図 石室の長さ幅

持ち併せていないが、地理的要因と政治的要因が関わっていることは想像に難くない。具体的な政治状況は今後の研究課題である(註10)。

6 本県本土部の中期古墳の特徴と歴史的評価

以上のように本県本土部の古墳時代中期には北部九州や肥後地方の影響を受けて作られた初期横穴式石室と、北部九州の竪穴系横口式石室の影響を受けて成立した石棺系横口式石室、さらに前代からの箱式石棺の規模を拡張した石棺系石室が存在したことが分かった。これらの墳墓の石室は一見すると当地の人々が箱式石棺に固執した地域性が現れたかのように見える。しかし筆者は古墳文化の周縁部で生きた当地の人々が箱式石棺の伝統を継承しつつ、彼らなりの企画や意図をもって新しい埋葬施設を創出した結果と評価する。現に、石棺系横口式石室と石棺系石室が、いずれも前方後円墳である、ひさご塚古墳の主体部となっていることが象徴的である。さらに言えば、そこには黄金山古墳の主体部に見られた肥後地方の影響が見られない点も留意すべきであろう。すなわち当時の権力の象徴であった前方後円墳に、従来の箱式石棺ではなく、肥後地方の影響も見えない新たな埋葬施設を導入し、他の墳墓との差別化を図り、首長墓としての威厳を示したと解釈できよう。

時期	前方後円墳 集成編年	須恵器編年	地域区分		
			マツラ	ソノキ	タカク
中期	4期				
	5期	TG232		黄金山古墳 ひさご塚古墳 佐世保鬼塚古墳	
	6期	TK73			
	7期	TK216 (ON46) TK208		前島6号墳 同7号墳	一野5号墳
	8期	TK23 TK47			一野1号墳 同3号墳 曲崎10号墳
後期	9期	MT15 TK10			小野古墳

第32図 長崎県本土部の古墳時代中期古墳の編年

以上のように本県本土部の古墳時代中期には北部九州や肥後地方の影響を受けて作られた初期横一方で、前方後円墳であるひさご塚古墳に先行する円墳の黄金山古墳も北部九州や肥後の初期横穴式石室の影響を受けながらも、石室と石棺が一体となった独自の埋葬施設を創り出している。

また佐世保鬼塚古墳の円墳に導入された主体部は北部九州型でもなく肥後型でもない筑肥型の初期横穴式石室であった。黄金山、佐世保鬼塚の両古墳は伝統的な箱式石棺を用いた葬送儀礼に固執することなく、他地域の墓制を積極的に取り入れ、さらに独自性も発揮している。このことが従来からソノキの有力者は当時の朝鮮半島との国際関係に何らかの形で関わる中で新たな埋葬施設を導入したと推定されるゆえんである（柳沢2002、橋本2018、宇野2014）。

さらに墳形によって埋葬施設の違いが顕著に見られることから、ソノキでは前方後円墳被葬者と円墳被葬者では階層差はありながらも両者の関係は比較的緩やかで、円墳被葬者の独立性、自立性が高かったことを表していると言えよう。

最後に石棺系石室について触れる。当地の石棺系石室は従来の箱式石棺の規模を容積、面積ともに拡張するという意図や企画が明確であり、箱式石棺のさらなる展開を目指したことが窺えることを強調しておきたい。当地の有力者の古墳時代中期の埋葬施設として石棺系横口式石室とともに採用されたと整理できる。

7. まとめ

上記のように本県本土部の古墳時代中期には北部九州と肥後地方の影響を受けた初期横穴式石室と北部九州の竪穴系横口式石室の影響を受けて成立した石棺系横口式石室、さらに当地の旧来の埋葬施設である箱式石棺の規模を拡張させた石棺系石室が造られていた。これまで長崎県本土部の古墳時代中期の墳墓は、前代の箱式石棺に固執した埋葬施設を持つというのが通説であったが、本稿では各階層で新たな埋葬施設を創出し、また外部から積極的に取り入れたりしていたと評価した。

また、これらの埋葬施設の検討からその規模や構築方法には当地の有力者の階層性が反映されていることが確実であり、有力者の中で上位層から下位層へ拡散していく過程で、小形化する傾向も見取れた。

さらに言えば、ソノキの古墳時代中期の多様な墓制を見る限り、宇野が指摘したように当地の有力者と倭王権との関係はさほど強固なものではなく、自立傾向であり、そのことはソノキ地域内の階層間にも当てはまると推定した。

本稿を執筆するにあたり、宇野慎敏、野澤哲朗・松尾秀昭・宮崎貴夫・渡邊康行の各氏にはお世話になった。末筆ながら芳名を記し感謝したい。

(2024年3月22日 脱稿)

(2024年5月6日 石棺系石室の類例として諫早市の下釜1号墳、同2号墳を追加)

(2024年6月3日 石棺系横口式石室の類例として長崎市の曲崎2号墳と同3号墳を追加)

【註】

- 註1** 1991（平成3）年から2000（平成12）年にかけて近藤義郎の編集により山川出版社から刊行された『前方後円墳集成』で用いられた編年である。
- 註2** 重藤は「九州の横穴式石室の出現期である4期を4世紀後半でも末に近い頃、中期初頭」と考えている（重藤2019 p. 26）。
- 註3** 櫛（しきみ）石とも言う。
- 註4** 従来の研究では石室床面より一段高くなっているなどと表現されてきたが、最近、山本翔太が「段状構造」と呼んでおり（山本2023）、それを参考に段状の構造物と表記した。
- 註5** 小鼠蔵1号墳は竪穴式石室とされているが、横穴式石室との異論もある（熊本県教委編2020）。
- 註6** 重藤輝行の編年では黄金山古墳に石障系と付記しており（重藤2018）、宇野も側石を（ ）付ながら「（石障）」と表記している（宇野2013 p. 139）
- 註7** 調査担当者の松尾秀昭（佐世保市教委文化財課）によると側壁、奥壁裏は土地所有者の意向により、トレンチ調査ができなかったとのことであった。しかし報告書の記述通り、石積の側壁があるようだとの教示を得た。
- 註8** 管見の限り、「石棺系横口式石室」の名称を初めて公にしたのは小田富士雄ではないかと考える。
- 註9** 宮崎貴夫によると弥生時代の墓制はソノキでは箱式石棺墓が主体であるが、タカクでは土坑墓と土器棺墓が主体で石棺墓は皆無である。マツラは土坑墓、箱式石棺墓、土器棺墓が混在する（宮崎1995）。古墳時代に入ってもソノキは箱式石棺墓が主体で、それまで箱式石棺が分布しなかったタカクにも箱式石棺墓が見られるようになる。その背景や原因は今後の課題である。
- 註10** 管見の限り、長崎県本土部以外に石棺系横口式石室が存在する地域はないので、現状では当地独自の埋葬施設と考えている。熊本県には箱式石棺に横口を設けた事例が存在する。具体的には同県熊本市の塚原（つかわら）遺跡の丸山8号墳、同34号墳は石棺の小口部分の板石に窓を開けた横口式石棺と整理されているし、同36号方形周溝墓は横口式冢形石棺と推定されている（熊本県教委編1975）。したがってさらに精査する必要があるが、前述のように筆者は石棺系横口式石室を肥前西部独自の埋葬施設と認識している。

【引用・参考文献】

- 有明町教委編 2001 『一野遺跡Ⅱ』有明町文化財調査報告書第14集 有明町教育委員会
- 飯盛町教委編 1995 『下釜石棺群・下ノ釜貝塚』飯盛町埋蔵文化財調査報告書第2集 飯盛町教育委員会
- 池淵俊一 1993 「鉄製武器に関する一考察—古墳時代前半期の刀、剣類を中心として—」『古代文化研究』第1号 島根県古代文化センター
- 諫早市教委編 1978 『小野古墳』諫早市文化財調査報告書第2集 諫早市教育委員会
- 岩本 崇 2022 「中期古墳年代論—相対編年とその暦年代—」『中期古墳研究の現状と課題6 新編年で読み解く地域の画期と社会変動』中四国前方後円墳研究会
- 宇野慎敏 2013 「大村市・黄金山古墳の再検討」『福岡大学考古学論集』考古学研究室開設25周年記念 福岡大学
- 宇野慎敏 2014 「九州島における4, 5世紀に—様相(3)—」『つどい』豊中歴史同好会
- 宇野慎敏 2018 「肥前西部における横穴式石室の展開とその背景—彼杵郡の軍事集団の出現について—」『西海考古』第10号 西海考古同人会
- 大村市教委編 1988 『小佐古石棺墓群』大村市文化財調査報告第13集 大村市教育委員会
- 小田富士雄 1979 「第15章 長崎県・黄金山古墳」『九州考古学研究』学生社 初出は『九州考古学』39・40号 九州考古学会 1970年
- 蒲原宏行 2019 「竪穴式横口式石室考」『弥生・古墳時代論叢』六一書房 初出は『古墳文化の新視角』雄山閣出版 1983年
- 熊本県教委編 1975 『塚原』—熊本県下益城郡城南町所在塚原古墳群の調査—熊本県文化財調査報告第16集 熊本県教育委員会
- 熊本県教委編 2020 『八代海周辺の装飾古墳—発生と展開—』熊本県文化財調査報告第337集 熊本県教育委員会
- 佐世保市教委編 2019 『鬼塚古墳』佐世保市文化財調査報告書第17集 佐世保市教育委員会
- 佐世保市市長室調査課編 1982 『佐世保市史 総説編』
- 重藤輝行 2018 「おじよか古墳の横穴式石室と九州」『おじよか古墳発掘50年記念シンポジウム「おじよか古墳と5世紀の倭」記録集』志摩市教育委員会
- 重藤輝行 2019 「肥前の初期横穴式石室とその拡散」『佐賀大学地域学歴史文化研究センター研究紀要』佐賀大学
- 重藤輝行・西健一郎 1995 「埋葬施設にみる古墳時代北部九州の地域性と階層性—東部の前期・中期古墳を例として—」『日本考古学』第2号 日本考古学協会
- 柴元静雄 1971 「夏崎古墳発掘調査概報」夏崎古墳発掘調査委員会 『新郷土』第266号
- 高来町教委編 1993 『中江遺跡・上田井原遺中江遺跡・上田井原遺跡・小江地区県営圃場整備事業にかかる埋蔵文化財緊急発掘調査報告書』高来町文化財調査報告書第1集
- 竹中克繁 2004 「九州壺形埴輪研究序論—壺形埴輪の変遷とその意義—」『熊本古墳研究』第2号 熊本古墳研究会
- 竹中哲朗 2003 「大村湾・橘湾沿岸の古墳・箱式石棺の検討」『西海考古』第5号 西海考古同人会
- 時津町教委編 1994 『前島古墳群Ⅱ』時津町埋蔵文化財調査報告書第2集 時津町教育委員会
- 中間研志 1986 「竪穴式石室・石棺系竪穴式石室」『九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告』6 中巻 甘木市所在柿原古墳群Ⅱ (I地区) 福岡県教育委員会
- 長崎市教委編 1978 『曲崎古墳群調査報告書』長崎市教育委員会
- 長崎市教委編 2002 『曲崎古墳群Ⅱ』長崎市教育委員会
- 長崎県教委編 1978 「久津石棺群の調査(大村市)」『長崎県文化財調査集報Ⅰ』長崎県教育委員会
- 橋本達也 2018 「おじよか古墳の副葬品と被葬者像」『おじよか古墳発掘50年記念シンポジウム「おじよか古墳と5世紀の倭」記録集』志摩市教育委員会

- 土生田純之 2015 「初期横穴式石室について」平成 27 年度講演会資料 岡山市埋蔵文化財センター
<https://www.city.okayama.jp/kurashi/cmsfiles/contents/0000005/5334/000246749.pdf>
- 林田和人 2002 「肥後における中・後期の様相」第 5 回前方後円墳研究会 古墳時代中・後期の土師器
- 東彼杵町教委 1994 『ひさご塚古墳Ⅱ』東彼杵町文化財調査報告書 第 6 集 東彼杵町教育委員会
- 秀島貞康 2013 「古墳時代」『新編大村市史』
- 開 正和 2000 「大村市黄金山古墳の調査」『西海考古』第 2 号 西海考古同人会
- 福田一志 1994 「IVまとめ」『前島古墳群Ⅱ』時津町文化財調査報告書第 2 集 時津町教育委員会
- 古門雅高 1999 「黄金山古墳出土土師器の検討」『西海考古』創刊号 西海考古同人会
- 古門雅高 2020 「大形成人用甕棺分布周縁地域の社会—長崎県本土部の弥生時代社会—」『西海考古』第 11 号 西海考古同人会
- 古門雅高 2022 「前方後円墳分布周縁地域の社会—長崎県本土部の古墳時代前期および中期を中心に—」『西海考古』第 12 号 西海考古同人会
- 古門雅高 2023 「【研究ノート】長崎県本土部の地域集団の存在と動向—弥生時代中期から古墳時代を中心に—」
<https://saikaikouko.jp/manpitasakuhin/chiikisyudan.pdf>
- 宮崎貴夫 1995 「五島列島の弥生・古墳時代の墓制と文化—西北九州地域との比較を中心として—」『風土記の考古学』5 肥前風土記の巻 同成社
- 柳沢一男 1993 「横穴式石室の導入と系譜」『季刊考古学』第 45 号 横穴式石室の世界 雄山閣出版
- 山中英彦 1974 「第 3 章 総括 1.石棺系石室について」『東宮ノ尾古墳群』北九州市文化財調査報告書第 14 集 北九州市教育委員会
- 山本翔太 2023 「京都平野における竪穴系横口式石室の展開と地域性」『歴史遺産研究』第 17 号 東北芸術工科大学芸術学部歴史遺産学科